

15. ^{99m}Tc (Sn)-PI の使用経験 (1)

井野 晶夫

(名衛大・内)

竹内 昭 古賀 佑彦

河合 恭嗣 浅野 智子

(名衛大・放)

篠原 力雄

(名衛生技術短大・生化)

^{99m}Tc で標識されたピリドキシルイソロイシン(PI)を使用して肝胆道系の検査を行なった20症例につき、その結果を報告した。検査方法は、 ^{99m}Tc -PI 3 mCi を静注し、直後よりガンマイメジャーにて1分間隔に、原則として60分まで撮像した。正常と思われる例では、注射後2~3分して心臓、腎臓の activity は消失しはじめ、肝が描画され8分前後で胆道系が描画され始め、腸管への排泄も見られた。20分頃より胆嚢は描画され、肝の activity は低下してきた。胆道系の描画と血液生化学検査との関連では、GOT, GPT, γ -GTP, Ch-E, BUN については、ほとんど関連がなく、最も関連があると思われたのは Al-p 値であった。T.Bil, 10.7 mg/dl Al-P 84 mU/ml のうっ血性肝障害の例は描画され、T.Bil 1.7 mg/dl, Al-P800 mU/ml の肝内胆管結石の例は描画されなかった。胆道が描画された Al-P 値の最高は 229 mU/ml で、描画されなかった最低値は 247 mU/ml であったが、この付近は、T.Bil, アルブミン値の影響が大きいと考えた。T.Bil 値については、症例の関係でこのシンチの限界は不明であった。アルブミン値については、3.0 g/dl 以下の症例では、心、腎の RI 停滞が長く、肝への RI up take が悪かったので、PI のアルブミンとの結合は、輸送、排泄に関連しているとも考え、ゲル濾過法にて蛋白との結合を証明し、電気泳動にてアルブミンとの結合の可能性を示唆した。 ^{99m}Tc -PI は肝胆道系のイメージングにすぐれた薬品であると考えられる。

16. ^{99m}Tc -PI の動態

斎藤 宏

(名大・放科)

三島 厚 加藤 清和

梶田 元一

(同・放部)

正常人男子9例のPIの動態を調べた。

肝への集積のピークは7~15分の間であった。胆嚢集積は8例中6例で60分以上にわたって上昇したが、40分以後2例で降下がみられた。食事をとったあとでは胆嚢集積が少なく、直接腸内へ移行した。肝からの排泄は25分から53分までの半減時間を示した。心臓部では注射直後は、血液による希釈、腎への排泄、肝摂取などにより、PIは急速に減少した。注射直後5分以内の曲線を除くとあと、2相にわかれるが、後の緩徐相は24分から70分の間であり、肝機能を反映するものと考えられる。

肝胆道系に異常のある各種疾患においては、上記のPI交替は一般におくれている。肝炎では胆嚢への集積が少なく、腸内排泄も低下した例があった。総胆管閉塞はその場所が明らかとなった。胆嚢内のくびれも描出された症例を示した。正常と思われた学生で、肝内胆管の拡張が部分的にみられた例で肝シンチを実施し、肝機能検査によっても慢性肝炎が発見されたケースもあった。

PIは、 ^{131}I -RB や BSP に比べて交替が早く、臨床診断上有利な点が多い。 ^{131}I に比し ^{99m}Tc を用いているため像もシャープである。なお症例を重ねて検討中である。

17. 胆嚢床の位置ぎめとしての ^{99m}Tc -PI の有用性

加藤 敏光

(岐大・放)

^{99m}Tc -フィテートなどによる肝シンチグラフィにおいて、しばしば肝門部および肝右葉下縁に defect を認め、それが腫瘍によるものか、胆嚢床